

郷音

こうる

流

第60号 2009年9月1日発行



本山（京都・東本願寺）留蓋瓦

2011年5月24日
（火）〜25日（水）の
一泊二日で西光寺で「御
遠忌法要」に参拝に行く
ことが決定しています。
50年に一度のご縁で
す。ぜひ一緒に参りま
しょう。現在募集中です。
先着順になりますので
お早めにお声をかけて
ください。

宗祖親鸞聖人750回御遠忌までいよいよ2年を切りました。西光寺でも「お待ち受け法要」をお勤めいたしました。本山での記念事業である、両堂等御修復も、親鸞聖人の御影を安置する御影堂の修復が終わり、去る7月16日、工事中覆っていた「素屋根」が取り払われるスライドセレモニーが執り行われ、御影堂を覆っている素屋根がいよいよ阿弥陀堂に移動されました。そして、御修復が無事に完了した御影堂の全容が、約5年ぶりに白洲からもご覧いただけるようになりました。

秋のお彼岸

9月20日(日)~26日(土)

彼岸会合同法要は24日(秋分の日)午前11時から 住職のお話があります

わかきとき 仏法は たしなめ

蓮如上人

「まだ、お寺に通うような歳ではないので」と言う人がいます。裏を返せば、寺は年老いてから行くところ、仏教は老人が聞くものというお考えでしょうか。

しかし、人間は老若に関わらず、誰しも人生の日々に迷い悩みながら生きています。その根底にあるのは自らの立脚地、こころの帰り場所の喪失です。別の表現で言えば、確かな価値観、人生の物差しを見失うということです。その喪失、見失いの原因は、生老病死という無常を受けとめられない私たち人間の無明の闇にこそあると示されたのが釈尊でした。

それは決して老人だけの問題ではありません。老若共に抱える人生の一大事なのでしよう。その生死を超越する道を示すのが仏教です。

その仏(覚者)道理に目覚めた人の法こそ、彼岸として示される阿弥陀の浄土であります。お彼岸の月、浄土からの呼びかけに耳を傾ける機会をお作りいただくことが大切なことだと思います。

『同朋新聞』9月号にもありますが、「彼

岸」というのは、私たちの生きる迷いの世界(此岸)に対して、彼の岸、覚りの世界、涅槃を表します。親鸞聖人のおことばでいえば、「生死の苦海」に浮き沈みするその「難度海を度する」という、念仏をいたたく私たちは彼岸から問われるものとして生きていくという大切なことが教えられています。

『感無量寿教』に、浄土の世界に目を開きたいという求めに応じて、仏は「心を専らにし、念を一処に繋けて、西方を想うべし：日没を見よ」とまず「日想感」を説かれます。善導大師は積まれて、陽が真東から昇り真西に沈む春秋を選ばれました。この善導大師の選びと西方の日没について廣瀬杲先生は「もし西方と指し示されなかったならば、浄土を知る心はついに安定することはないだろう。無限に浄土を穢土の中に探して夢の上に夢を見ながら一生を終るだろうと、こういう問題をそこにあきらかにしていく」と仏の教えのこころを示してくださいました。彼岸の行事の意味もまた、このことを私たちが明らかにすることであると受けとめていきたいものです。

聞法三つの心得

高山市・真蓮寺住職 三島多聞師

(難波別院発行「南御堂」紙より転載)

仏法を学ぶ態度

聞法についての心得とはなにかということについては、蓮如上人は『御文』や『蓮如上人御一代記聞書』に、ちゃんと説かれておられます。

もう30年も前になりますか、高山へ蓬茨祖雲という先生が来られ講義をなさいました。質疑応答の時、ある方が「真宗聖典をどう読んだらいいのでしょうか」と質問されました。実際、どこから読み始め、どう読んだら仏法がわかるのかは、仏法を学ぼうとする者にとつては重大な関心事であります。それで興味津々として先生の応答を待ちました。すると先生は、両手に聖典を持ち、静かに聖典をおしいただかれ、そして聖典を机の上におろしつつ、「このようにして読んでください」と言われました。かつてそのように聖典を開いたことがなかったもので、びっくりしました。すぐに、これまでの仏法を学ぶ態度の根本的な間違いを感じたことです。

仏法を聴聞するということの「心得」とは、こういうことであつたのかと気づかせていただきました。では、この心得を三つにわけておはなしします。

今のご縁は初事

今、現在出遇い関わっているすべてのことを「今のご縁」と表現します。聴聞ばかりでなく、生活全般にわたる心得です。仏法より学び知った「心得」が、そのまま生活する態度であるということです。『聞法の三つの心得』は「人生三つの心得」と言い換えて言いと思います。

「ひとつことを聞きて、めずらしく、初めたる様に、信のうえには、有るべきなり」

(蓮如上人御一代記聞書130)と蓮如上人は教えてあります。先入観をもって聞いたり、わかつたことにしている態度では仏法はわからぬということですから。いつの間にか

「神にも、馴れては、手ですべきことを足するぞ」

(蓮如上人御一代記聞書138)となりませう。飲酒運転が問題になっていますが、プロになればなるほど心掛けなければならぬことです。

世阿弥は「初心忘るべからず」と能の奥義を伝えています、『御文』に「もろもろの聖教をよみ、ものをしりた

りというも、一念の信心のいわれをしらざる人は、いたずら事なりとするべし」

『御文』五帖目第二通

と説かれています。これは「初事 初めたる様」に聞くといい心得の欠落をおさえられるの教えと申すのです。

初事の心得は、我々に慎重さ、初々しさと好奇心、そして初事として自己に出遇い続け、新しい世界をもたらす教えです。



今のご縁は我いちにんのため

「われいちにん」というおさえは、仏法の基本中の基本の心得です。『仏説無量寿

経』には、「独り生じ独り死し独り去り独り来りて、行に当り苦楽の地に到り趣く。身、自らこれを当くるに有も代わる者なし」と説かれ、また、龍樹菩薩は『智度論』で「如来、我がために法を説きたもう。余人のためにはあらず」と諭され、

宗祖親鸞聖人は『歎異抄』で

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけりと述懐しておられます。

蓮如上人は
「往生は一人一人のしのぎなり。一人一人に仏法を信じて後生をたすかることなり。余所ごとのように思うこと、且つはわが身をしらぬ事なり」(御一代記聞書)と、一人の有り様を教えてあります。この我が身一人のところで、身の事実を聞くのだという心得こそ大切であることが知らされます。と同時に、「この一人」は「すべての人」に通じる一人です。他者との関係を開く一人です。私さえよければ、自分さえ救われれば、という一人ではありません。

「衆生」に二つの読み方があります。「私の中に幾代もの他者のいのちを見る」というタテの衆生、「他者の中に私のいのち

を見る」というヨコの衆生です。何年前、新大久保の駅で韓国からの留学生が線路に落ちた人を救けようとして亡くなるといふ事件がありました。線路に落ちた人の中に自分のいのちを見たからその行動だったと思います。いろいろ分別していたら飛び込めません。弥陀の大悲もそうではありませんか。

「一切の衆生は、悉く仏性を有す」
〔涅槃経〕

のお言葉は、衆生の中に成仏の可能性を見る大悲です。私に大悲が架かっているのは衆生の中に「我を見る」からなのでしょう。いかなる私でも「決して捨てない：不捨」といふ如来の大悲を感じる時、ここに共なるいのちのかたじけなさがあります。如来の「我一人」をはずさないところに、仏法の極意があります。だから「我一人のため」といふ心得は、我々に主体の確立と、かたじけなさとおかげを知らせ、それ故にいのちの尊厳に対する態度を決定させる力となるのでしよう。

今のこの縁は今生最後

蓮如上人は「今日の日はあるまじきと思え：仏法のうえにては、明日のことを今日するように、いそぎたること」(同)と

明日のことはわかりません。わからないことの最大のものは寿命の尽きることで。別の言い方をすれば、今は今生最後の時という心得です。

4年前福知山線での脱線事故で多くの方がお亡くなりになりました。ニュースで見たのですが、60歳前後の父親が娘さんの死を悲しんでいました。もう一度、元氣な娘に会いたい！と語ったあと、しばらく沈黙していましたが、絞り出すような声で「一目なりとも会いたい！」と言いました。日頃会っていたことが、いかに大切に大事なことであったか、身近な大切な人が亡くなってはじめて身にしてみわかるのですね。一期一会ということがありますが、今回限りの思いは、そこに深い思いやりが生じ、粗雑なありようが消える世界です。

「今生最後」といふ心得は、一番大切な事を発見させる力となるのです。

「聞法三つの心得」は、それぞれ別の事柄ではなく、ひとつとなってはたらくべきです。我を張る必要のない世界、いのちを素直に見つめ気づかせる力を私たちに与えてくれます。

この三つの心得の上に「南無阿弥陀仏」が成就するのです。逆説すれば南無阿弥陀仏の教えは、私たちに、この三つの心得を教えていると言えるでしょう。

行事の「案内」

11月3日(文化の日)

午前11時 勤行

午前11時半 法話

金倉泰賢先生

(北海道雨竜郡秩父別 高德寺住職)

12時半 マジック・シヨウ

13時 お斎(昼食)

報恩講は、親鸞聖人のご命日をご縁として、私たちが如来のご恩、親鸞聖人のご恩に報いていくというお勤めでございます。本当に私たちは、教えを聞いたものとしての生活を毎日送っているだろうか、このことを年に一度、親鸞聖人のご命日をご縁として、確かめていくというのが報恩講です。

今年は、一昨年ひよんなことから再会することになった金倉泰賢先生を北海道からお呼びいたします。金倉氏は住職とは約30年前、京都の大谷専修学院で共に学んだ中です。学院は全寮制の学舎で、

学院の先生たちとも寮生活を送りながら(ブラザーシステムといいます)、どこまでも自己を問うという仏道の学びをするところです。金倉氏とは寮が違ったのですが、学院祭で「弥陀の智慧ブラザーズバンド」というバンドで演奏したときに(住職はドラムス担当です)司会を買って出られ、軽妙な語りで場をスムーズに進行していただきました。

ぜひ、ごいっしょに法話をお聞きいたしましょう。

また、西光寺の手次ぎでもあります源隆寺の住職も報恩講にはご出仕いただきますが、ご門徒の吉井さんのご主人とお嬢さんによる手品を愉しんでいただくよう企画しました。春はロック・コンサートの秋はマジック・シヨウということで、こちらもご期待ください。

御真影還座式(ごしんねいげんざしき)

9月30日(水) 12時半〜16時

750回御遠忌の特別記念事業である御影堂御修復工事の完了に伴い、阿弥陀堂に安置されていた宗祖親鸞聖人の御真影を御影堂へお戻りする「御真影還座式」を行います。西光寺から福田総代が東京二組門徒会長でもあり、東京教区門徒会

の奉仕団として参加いたします。住職も一般参加として列席する予定です。

親鸞聖人に人生を学ぶ講座③

10月21日(水)

18時半〜21時

6月に始まっている講座で、8月に2回目を行い、第三回目は西光寺が会場になります。既にご案内済みですが、親鸞聖人の御遠忌をきっかけとして、この不透明な時代に確かな拠り所を、時代・民族を超えて明らかにされた教えを聞いていきたいと念願し開催しているものです。カジノ的金融経済による世界的不況の中、おそらく貴族から武家へと大きな時代の転換点であった鎌倉時代と現代は重なるように感じます。苦悩する人々の灯火となつた親鸞聖人の時代と課題は同じではないでしょうか。教えは苦悩の身にこそ響きます。ぜひご参加ください。会費は千円です。



「法然と親鸞」

観劇のお知らせ

12月上旬 青山劇場にて

嵐 圭史 中村梅之助 今村文美出演

宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌を縁に、前進座が「法然と親鸞」という舞台をおこないます。

親鸞聖人の師である法然上人とは四〇歳ちがいで、法然上人は八〇歳、親鸞聖人は九〇歳でお亡くなりになっておられますので、親鸞聖人の七五〇回忌は法然上人の八〇〇回忌でもあるのです。

法然上人はどういう方であったか、また、親鸞聖人がなぜ師と仰ぐことになったのか、法然・親鸞の課題とは何であったのか、親鸞聖人が結婚を選んだことの意味はなんであったのかということ、場面場面でよく描かれたお芝居になっていて、昨年、吉祥寺の前進座での通し稽古を見る機会をいただいて感じましたので、広く皆さまにご案内したいと思えました。

西光寺では12月8日(火)又は9日(水)の午後4時からの公演に募って観

劇を計画しています。

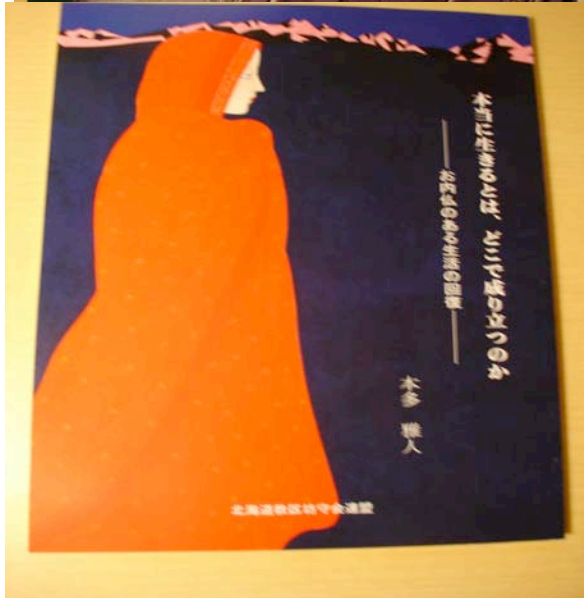
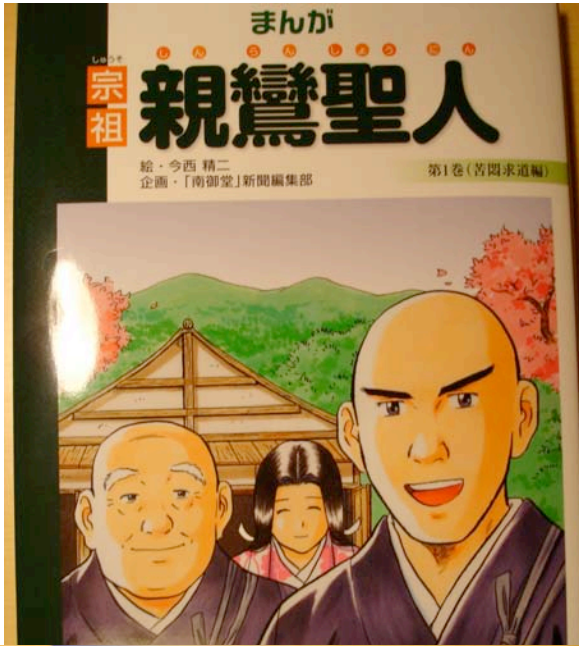
チケット代はお芝居ですから少し高いのですが、寺院特別割引があり一万千円を八千八百円にしていただけです。この機会にぜひ、一緒に「法然と親鸞」の観劇に行きたいと思えます。お寺までお申し出ください。

光明土 海一味

本で紹介 西光寺でお分けしています

『まんが 宗祖親鸞聖人』第一巻
(苦悶求道編) 絵 今西精二 難波別院
900円

弘長2年(1262) 11月28日親鸞聖人入滅から物語が始まり、末娘の覚信尼は父である親鸞聖人の歩んだ道を母である恵信尼から知らされるといふ導入部から。若き日の苦悶求道の歩みを漫画で読んでいきましょう。全3巻の内第一巻



『本当に生きるとは、どこで成り立つかーお内仏のある生活の回復』

本多雅人講述 北海道教区坊守連盟
200円

2008年9月30日、札幌パークホテルで行われた北海道教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け大会「婦人の集い」(既報の通り、西光寺住職も参加)での西光寺永代経でもおなじみの本多雅人蓮光寺住職の記念講演録。御遠忌テーマ「今、いのちが あなたを生きている」の呼びかけに応えます。現在、西光寺輪読会でも使用中です。

住職の動向(三ヶ月抄)

6月 枕勤め、門徒さん入居ホーム訪問、通夜・葬儀、法事10件、九州在住門徒脳出血入院見舞い(福岡)、正副組長会出席、親鸞聖人講座打合せ、親鸞聖人講座第一回目(責任者) 浅草仏教会総会、西光寺輪読会、門徒検査一泊入院のための付添、同朋総会出席(座談会司会)、2組4役打合せ、
7月 初盆(1日〜7日まで各宅へ9件) 初盆合同法要1回、門徒病院検診付添4回、法事7件、枕経・通夜・葬儀(17・18・19日) 二七日お参り、親鸞聖人講座反省会、教区正副組長会親鸞講座(本郷)受講
8月 枕経、通夜・葬儀二件、蓮光寺法話会参加、教化委員会、戦没者追悼法要、組会計監査立会、ホーム訪問、都内正副組町会及び、裁判員制度勉強会、親鸞聖人講座第二回、及び反省会、組会資料作成及び印刷、組会、選挙管理委員会、西光寺輪読会、法事七件、教務所歓迎会

響流 第60号

発行日 2009年9月1日

発行人 真宗大谷派 西光寺
住職藤石哲朗(釋徹舟)

110-0015 台東区東上野 6-15-6

TEL 03-3841-3229

Fax 03-5828-4495

e-mail

saikoji@xvh.biglobe.ne.jp